

# 平成26年度の東京鶴城会総会・懇親会で待っています！

**故郷に想いを馳せ 熱く青春を語り  
そして明日の夢を語ろう！**

総会は、東京鶴城会の最大のイベントです。そこに向けて、幹事会を中心に活動しています。直近の幹事会の様子が右の写真です。自由で前向きな発言が多く、最近では明るく楽しい雰囲気です。「どうやったら来てもらえるか、楽しんでもらえるか」等、話し合いは活発に行われます。同窓生が年に1度集う会は、とても有意義なものです。参加しないより参加した方が良いでしょうと思います。青春の3年間を過ごした宇土高校が唯一の共通点ですが、自分の中では、それ以上の時間と思い出と価値を占めているかもしれません。懐かしい出会い、奇跡的な出会い・・・、美味しい食事もお楽しみに。（事務局）



**東京鶴城会便り**

発行責任者  
田中幸資

## 平成25年度東京鶴城会フォトコレクション



是非、ご参加ください。  
東京ドームホテルで、楽しいひと  
時をお過ごしください！



参加の大学生達が、ステージ  
上で、自己紹介と将来の抱負  
を熱く語ってくれました。



熊本物産販売は、毎年、大好評で即完売です！！

楽しいイベント、大くじ引  
き抽選会等で満喫した時間  
をお楽しみいただけます！

## 二次会にて



今年の東京鶴城会総会・懇親会  
に是非、ご参加ください。  
二次会もエンジョイしましょう！

# 東京鶴城会総会でフラメンコを踊らせて頂きます！ 「JALEO（ハレオ）」の掛け声をお願いします

昭和58年卒、バスケット部に所属していた「るい」です。あの頃は、髪は刈り上げで、制服のセーラー丈短め、スカート長めで中途半端にワル的生徒でした。日中は寝てる、走ってる、泣いてる、早弁してる毎日。先生達は、さぞかし嘆いていたことでしょう！さて、そんな私もバブル期を経て女性らしく振舞うことも覚え、熊本マハラジャ通いOL時代を経て、転勤希望して神奈川に定着しました。きっかけは、育児の気晴らしで始めたフラメンコ。普段着ることのない艶やかな衣装、普段する必要のないメイクに胸がときめき。

諸事情でお休みした時期もありましたが、再びいい先生に巡りあえて、先日はチャリティアライブで初ソロを踊ることができました。振返れば少々無謀なチャレンジでしたが、新宿エルフラメンコでソロで踊りたいというのが夢だったので、「夢に近づいた！」と臨みました。緊張のなか始まったライブ。なんと、せっかくの見せ場をすっぱし、どうしても元のフリに戻れず、フリをなんとか組み合わせて、「これで締めますっ！」

とバックに合図を送り、はけました（泣）。この度、総会のパフォーマンス大会でチャンス頂きまして、ソロの時間を頂戴致しました。リベンジできますでしょうか。踊らせて頂く曲は『ティエントス』という曲で、手探りという意味があります。曲調は、前半重く暗い感じで始まりますが、後半タンゴのリズムではけます。私は、この曲は男らしくガツガツいく感じと解釈していたのですが、真逆で、クールビューティなイメージで女性らしく、しなやかに踊る曲なんだそうです。腕や腰のうねり、コンパスを刻むテクニックがとても難しいです。部活みたいに自主練を含め、週2~3日練習していますが、表現できているか、チェックしてくださいね。また足さばきも見せ場です。「いいぞ！」というとき、ぜひ「JALEO」をお願いします！JALEOは、舞台や客席からかける掛け声で、一般的なものは『オレ！』です。

ほかに、エッソエ、バモー、アッサーなどがあり、いずれも「いいぞ！息があってるぞ！いけいけ！」などの意味があり、

踊り手や歌手の気分を盛り上げてくれるものです。当日は、客席からのJALEOで盛り上げて頂きたく存じます。『Ole! Kayoko ~!』のJALEOをどうかご協力のほど、お願い申し上げます。

～『ティエントス』レトラ  
(歌詞)の一部ご紹介～  
悩みをもつ者は眠れないと言う  
が俺はいつでもよく眠れる、  
つまり俺が言いたいのは、ヒ  
ターナよ、おまえをもう愛して  
ないということさ。

昭和58年卒 楠村 佳代子



## 『私の釣りバカ日記』 - “スミイカ釣りに行ったとです” 編



昨年12月23日(快晴)、私はY社長と二人でスミイカ釣りに行って来ました。浦賀水道は、朝は入船が多いため、ラッシュ時を避け、午前10時に出船しました。目的地は、千葉県竹岡です。当地・観音崎からマザー牧場方面へ横断します。クルーザーの運転は、一級免許取得のY社長にお願いし、私は、見張役を務めました。クルーザーは久里浜港を出港時、東京湾フェリー「しらは丸」(金谷行き)と横に並びました。同フェリーの甲板から見知らぬ若い女性が、我々に手を振っていました。Y社長は、窓を開け手を振り、なんと、“**投げキッス**”までしました。Y社長は、私に「お前もバカをやれ！」と半ば強制的？に言われ、私も夢中で、満面の笑顔でその女性に手を振りました。こんな光景を私の妻が見たら、“**工口爺**”と思ったでしょう。

浦賀水道は、3個の大きなブイで2航路に仕切られた右側通行です。クルーザーは、船速25ノット、約30分で漁場の竹岡水深30M付近に到着しました。ハリス3号1.5Mギジバリ、アジカラ魚、スミイカは海底から50センチ位の所にいます。釣り始めて10分位で当たりがあり、その後も、Y社長と二人で次々と釣れました。私は、イカを釣り上げた際、不覚にも顔面に“**イカ墨**”をかけられてしまい、Y社長に大笑いされました。とんだ災難でしたが、この日は、スミイカ28杯、アオリイカ3杯の漁獲でした。

井上 二郎 (昭和36年卒)



## 我が故郷・三角に帰ることになりました。

昭和46年3月下旬に就職のために上京してから約43年、「もう十分働いた。」と思うので、三角に帰ってのんびりと暮らすことに決めました。

昨年退職して年金生活に入ったら、目が覚めたときに起き、眠いときに寝るという生活に完全に馴染んでしまいました。そうなると、今更、満員電車で押し込まれて仕事に行くという気にもなれません。また、元々無趣味な上に団地住まいで近所付き合いも殆どしていないから、地域での友達もいません。更に、諸先輩から言われ続けていた「退職したらやるべきこと」を結局、今まで見つけられず、何もしないまま、漠然と過ごしてきました。でも、何もこの年になって「**自分探し**」とか「**自己実現**」とか求める必要はないのではないかと、要するに「自然体で、風の吹くまま、気の向くままの時間を過ごしても良いのではないかと向上心の欠片も無い性格で居直って考えると、「直下型地震とか富士山噴火、東南海巨大海溝型地震等々の自然災害に怯えている浦安に何のために住んでいるのだろう」という疑問も生じてきました。

また、親も既に平均寿命を過ぎているけど、その世話も弟たちに頼ったまま、「長男として、少しは自分でもやらなければ、親不孝したままで別れを迎えることになるのではないかと」ということも考えた結果、「今の生活を捨てて三角に帰ろう」という結論になりました。

家内も宇土高卒（昭和47年）なので否やはありませんでした。息子は夏休みや正月に三角に帰って爺ちゃん・婆ちゃんに遊んで貰った思い出があります。今度は、自分達と遊びに夏と冬に孫達

が来る、そして春と秋には爺ちゃん・婆ちゃんが孫に会いに東京に行く、という生活も良いのではないかということになりました。

そういうことで、住んでいるマンションを売りに出したところ、意外と早く売れ、3月中旬に退去することになってしまいました。三角の家は5月にならないと住めないため、それまで家内の実家に居候することになりそうです。

「三角に帰って何をやるの?」と良く聞かれますが、同級生がみんな元気なので、魚釣りや野菜作りをプロに教えて貰いながら、月に1~2回は九州の温泉巡り、年に1~2回は孫の顔を見るために東京、等々と考えると結構忙しいのではないかと思います。

そんなこんなで、最初に小金井（東京都）に住んでから、仕事の都合や子供の成長等に合わせて3~4年おきに9回の引越をしてきましたが、10回目で、そして、多分これを最後に、再び振り出しの“**ふるさとに戻る**”ことになりました。

以上のように全くの個人的な事情で、東京鶴城会の副会長という役目を仰せ付かっていながら、何もしないままに辞めてしまうことになりましたことをお詫び申し上げます。

また、田中会長や河野事務局長を始めとする、宇土高の先輩・後輩の皆様方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

池田伴雄（昭和42年卒）

## お見通しだった!?



「九州の台風は強烈だ。瓦をもぶっ飛ばす勢いで吹く。嵐はまだか、ほうら来るぞ来るぞ。大人も子供も上気する。子供は嵐の夜は眠れない。朝になるのを待って、落ちた柿や栗の実を拾いに走るから。大きな嵐が二~三回来てやっ」と秋は色づき始める」と祖母はよく言っていた。

看護学校一年生の夏休みに、和ちゃんとユースホテル（YH）利用の船旅に出た。目指すは南の島々。「何とかなるさ」と思った台風と見事にぶつかった。私達の乗った小さな船は、木の葉のように揺れながら、種子島に着いた。そもそも予定では、ここに泊して、船で与論島に渡り、たっぷり五日間、熱帯魚と戯れるはずだった。

ところが台風の余波で海が荒れてなかなか船が出ない。種子島での生活も四日目となると予算オーバーだ。現在のようにコンビニのATM等ない時代である。「そろそろ行こうか」昨日もそうしたように、昼前に二人でユースホテルを出た。泥色の海、広い砂浜にまで波が猛って押し寄せる。二時過ぎに戻ると、ペアレント（YHの主人はこう呼ばれる）が、じっと私達を見つめて「腹減ってるんだろうが」と、カレーの大盛り皿をドンと出してくれた。一昨日から昼食を抜いていたのを見抜かれていた。「すみません

頂きます」と、がつつ食べた。煮込まれたじゃが芋が上あごでつぶれた。

その日、地元の若者に天の川を見に行かないかと誘われた。暇を持て余していたし、朴訥な話し方に警戒心を解いた。夜8時に若者二人は、何と軽トラックで迎えに来た。荷台に乗って、真っ暗な怪しい道を進むと、突然車はガタンと傾いた。大雨で崩れた、どろどろの轍にはまり車が動かない。私と和ちゃんも、降りて後ろから一杯押した。タイヤがぶんと空回りしたとたん、べちゃりと何かを投げつけられた感触。顔から膝まで泥まみれ。星どころではない、「早く帰ろう」と。ユースホテルのずっと手前で降ろされた。あの時、急に笑顔が消えて慌てふためいた彼等。「ひょっとしたら、男どもは私達の“**純潔**”を奪う魂胆だったのかな」と後で話し合った。嵐に助けられたのだ。

玄関先でうな垂れる頭の上から、「ばかたれが...」と、ペアレントはぼそりと言った。私達が門限を破り、こっそり出て行ったのを後で知り、これまた男らの企みまでも“**お見通し**”だったのかもしれない。

田中久美子（昭和43年卒）

## 私の高校生活（1年5組編）

私と宇土高校の出会い、S47年1月の受験から始まります。私は、大矢野出身で、高校の近くの旅館に前泊をして受験に臨みました。旅館名は忘れてしまいましたが、私達、大矢野中学校と青海中学校が同宿になり、総勢、約30名ほどで、翌日は受験とは思えないぐらい、まるで、修学旅行みたいな騒ぎで、一夜を明かしたことを覚えています。次回以降に記述しますが、その時はもちろん、まだ判らないのですが、私にとっては今でも胸の中で甘く、切ない思い出となる人との出会いがあった日でもあります。

私は、子供のころから自分の容姿には自身がないので、女性と近づく方法としては、笑わせることしかないという、悲しい世渡り術を身に着けていました。その日も、そのお調子者の性格で「ホゴ出して」引率の先生から注意を受けたものです。受験で覚えていることは、前泊と宇土高校のプールサイドで弁当食べた事ぐらいですが、奇跡的に合格することができました。

さて、いよいよ4月から念願の宇土高校1年生。前述したとおり、私は大矢野の出身で、大矢野でも一番南部の長砂連（ながされ）という所で、通学は無理なため、学生寮か下宿するしかありません。元来、自分を鍛えるなんて考えが全く無く、楽なほうに流され易い性格のため、厳しい寮生活などは、絶対に無理と考え、幸運にも先輩の卒業生が住んでいた下宿の話を聞き、母親に頼み込んで、高校のすぐ裏にある、左官屋さんが営む下宿で生活することになりました。今考えれば、それが悪かった・・・・・・・・。親元を離れ、羽を伸ばせる楽しい高校生活が始まると思ったのですが、クラブ活動よりも厳しい、1年から3年まで8人の縦社会の生活が始まったのです。

皆さんにも想像がつくと思いますが、下宿は「溜まり場」なんです。それも、学校中の「悪ごろ」が集うのです。当初、すぐにでも、下宿を出ようと思ったのですが、弁当を含めた、毎日のおいしい食事、本当に親身になってくれる、おばあちゃん、左官の親父さんとおっかさん、1歳上の松橋高校に通う息子たちの人柄、親切さ、何よりも、1歳下の娘の可愛さの魅力に勝てず、そのまま3年間過ごすことになるのです。

「縦社会の生活」、「悪ごろ達の集う生活」にもすぐに馴れて、その内に私も「可愛い悪ごろ」になってしまいました。

学校生活は、大矢野の田舎から出てくると、宇土といえども、私から見たら、洗練された都会に見えるのです。言葉も違うし、何しろ、女子が綺麗に見えました。1年5組の教室に初めて入った日に、「こぎゃんよか女子は大矢野にはおらん」と何度も思いました。あれは、何だったんでしょうか、制服にだまされたのでしょうか。後で、「おるが目は節穴ばい、錯覚だったつばい」と思い知らされました。また、男子もみんな優秀に見えて、自信喪失した覚えがあります。

そんな私ですから、授業なんかに入身が入る訳がありません。毎日、「あん娘がよかろうかい。こっちゃん方がよかろうかい・・・」です。色気ばっかりついた1年生でした。本当に「バカばい」でした。

そんな私にもついに、春が来たのです。もちろん、自分から告白する勇氣など全くない、また、告白などしたことはありません。ところが、お節介はどこにもいるもので、間に立って設定することを生き甲斐とする女子が居ったつです。今でも腐れ縁で付き合いのある、「Y子」が、その頃、可愛いなあと思っていた、「Mちゃん」との間を取り持ってくれて、ついに、生まれて初めての「付き合い」を始めることになったのです。笑わないで下さい。「交換日記」をはじめたのです。恥ずかしくて、二人になっても、話もできない。ましてや手を握るなど以ての外。ある日、「Mちゃん」からいろいろと気持ちを書いた「ノート」をもらい、それに返事をするということから始まったのです。その間、腕時計も交換して持ってましたが、二人でデートした覚えもなく、いつの間にか、そんな可愛らしい「恋愛」も自然消滅してしまいました。その後も、相変わらず「あん娘がよかろうかい、こっちゃん方がよかろうかい」の毎日です。学業は皆様の期待を裏切らない結果でした。赤点ばかりで、学期末では追試と父兄召喚は我が家の恒例行事となってしまいました。2学期の期末テストでの数学ではついに0点を取ってしまったのです。生まれてはじめての0点で相当落ち込みました。「理科室のガス管を啜えようかな」と本当に考えたほどでした。生活面では、同級生のみんが学業、クラブ活動に励んでいることを横目に、下宿の優しい先輩方の、教科書に代わる、エロ本の提供により、学業とは違い、すすくとソチラの知識だけは伸びて行き、クラブ活動の厳しい練習に代わり、マーシャンパイの積み方、ルール、煙での綺麗な輪の造り方等々、学生には何の役にも立たない知識だけが伸びてしまう毎日でした。また、大矢野では、漁師の皆さんの影響からか、音楽も、「森進一」や「八代亜紀」、「クールファイブ」の演歌しか聴いたことなかったのが、「たくろう」「おかばやし」「ようすい」などのフォークソングとやらの音楽との出会いで、カルチャーショック。これ以降、今でもカラオケでは「フォークソング特集」。このように書いてくると「どんな高校生生活だよ」と思われるでしょうが、私にとっては、本当に楽しい1年生でした。しかし、2年生になったらもっともっと楽しい、バカな、そして甘く切ない、高校生活が待っていたのです。2年生編は次回です。

昭和50年卒 松藤 明



# 高校野球と故郷

今年も選抜高校野球大会が開催された。現在、住んでいる群馬県の代表、桐生第一高校は残念ながら準々決勝で負けてしまった。

ところで、時期がくれば今度は夏の甲子園である。夏の甲子園のスタートは県予選から始まる。その予選の結果を新聞で確認するのが日課となる。「九州」→「熊本」ときて「宇土」を探す。残念ながらこれまでには予選敗退が続いている。甲子園球場での試合が始まると熊本代表を応援している。以前、娘に言われたことがある。「何で住んでいる所の代表でなく熊本を応援するの?」「自分が卒業した高校があるからだ。」と答えたが納得した様子はない。このような感情を持つのは、自分だけだろうかと思うことすらある。かように何かしら懐かしさを抱かせる響きが「宇土」にはある。

毎年、昭和42年卒の関東地区の同窓会が開催される。参加すれば、いつのまにか普段使うことのない熊本弁丸出しで話はずむ。ぐちも悩みもすべてを受け入れてくれる。いつまでも話をしていたい気持ち良い空間である。(ここ2年ほど事情で参加できていないのが残念であるが)

年齢も65歳となり、ゴルフをはじめとして、いろんなシニア割引が利用できるようになった。うれしい反面、さびしさもある複雑な気持ちである。幸い同級生にゴルフにつきあってくれる友人がいる。毎回、プレーと話を楽しみにしている。体力の続く限り楽しみたいと思う。

年1回、実家に母がいるので、短期間であるが帰省する。その時に弟がよく車で連れて行ってくれる。轟水源に行くこともあり、その時は、宇土高校の横を通る。今年は住吉・網田方面へ車を走らせた。その時に、同級生と挨拶程度の短時間であったが、会うことができた。何年も会っていないのに笑顔で迎えてくれた。友人と会えたこともあり、久しぶりに見る有明海は、ことのほかおだやかで輝いて見え、気持ちまでやすらいだ。

これからも同級生とは末永く付き合いをしながら、楽しい時間をより多く持ちたいと思う。



昭和42年卒 大田敏幸

## 熊本弁講座 - 「く」編 -



創刊号からシリーズ化した熊本弁講座ですが、またしても、好評につき(ほんなこつか?)、今回は「く」編です。どうぞ声に出して、熊本弁を懐かしんでください。

- ①「ぐらり」(がっかり)  
「宝くじが外れたけん、ぐらりしたばい」  
(宝くじが外れたので、がっかりしたよ)
- ②「ぐっさり」(たくさん)  
「デコボンば、こぎゃん、ぐっさりもろて、あがと!」  
(デコボンを、こんなに、たくさん買って、ありがとう!)
- ③「くらす」(殴る)  
「謝らんと、くらすぞ!」  
(謝らないと、殴るぞ!)
- ④「くる」(行く)  
「おっだんね、今からそっちゃん、くるけんね。よかる?」  
(俺だけど、今からそちらに、行くからね。いいだろ?)
- ⑤「くだはい」(下さい)  
「こん、あばの服ば、くだはい」  
「この、新しい服を、下さい」

It's a Kumamoto Dialect

## 幹事会・事務局からのお知らせとお願い

会員みなさま、お変わりありませんか。

今回、会報『東京鶴城会便り』も8回の発行になりました。故郷の風と香りをお届けしたいと思い頑張っています。今後とも財源が可能な限り、続けたいと思います。

宇土中・高校の卒業生という接点を大事に、人とのつながり、人生の潤滑油としても楽しい同窓会です。さらに発展させましょう。

以下、いくつかのお知らせとお願いです。

- (1) 会報の原稿を常時募集します。
  - ・あの日・あの時、故郷のこと、こんな人あんな人等、テーマは自由です。発行を楽しみにしている方が多くいらっしゃいます。あなたも投稿してみませんか。
  - ・感想、希望などお聞かせください。気楽にお願いします。
- (2) 住所、氏名などの変更は是非ご連絡ください。消息をご存知の方もお知らせください。個人情報に他に漏らすことは絶対ありません。
  - ・連絡がないと途絶えてしまいます。
  - ・同期会などの名簿をお送りください。
- (3) 年会費、広告、寄付をお願いします。
  - ・年会費が活動のベースです。単年度の収支は赤字です。わずかの繰越金で食いつないでいます。
- (4) 総会・懇親会への出席をお待ちしています。
  - ・同期、知り合いをお誘いの上ご来場ください。お一人様も、もちろん大歓迎です。

連絡先は、封筒の差出人(事務局)へ。原稿は事務局または、編集部の方までお願いいたします。

Email 河野 [kohno@msd.biglobe.ne.jp](mailto:kohno@msd.biglobe.ne.jp)

坂崎 [mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp](mailto:mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp)

## 遠足前夜の心境です！

子供の頃、遠足の前夜嬉しさのあまり寝付けなかったことは、多くの方が経験していますよね。私は宇土高生になっても、1年の修学旅行前日は興奮しすぎてなかなか眠れませんでした。今まさに遠足前夜の心境です。昨年、勤続30周年となり、この5月に5日間連続の年休を取ることにになりました。土日と合わせ9日間の連続休暇となることから、一人旅をすることにし、行き先は迷わず熊本に決めました。今から何処を訪ねようか“ウキウキ”しています。

思えば、40代半ばまでは適度に帰省し、観光地を散策していましたが、最近では、宇土半島を一周することだけが唯一の楽しみになっていました。今度はゆっくりと熊本に滞在できるので、身近でありながら、足が遠ざかっていた所を訪れることにしました。

まずは、宇土市です。実は私は轟水源に行ったことがありません。「宇土高にとても近いのに」です。阿蘇の白川水源等とは違い、ありふれた所であるが故に、今回を逃すと一生行かないだろうと思います。平凡な風景であることを確かめるのも一興です。また、最近知ったことですが、宇土高の近くに大楠があるようです。宇土高のすぐ南に位置する栗崎町という所に、「天神樟」と呼ばれる巨木が2本あるそうです。宇土出身ではない私には初めて聞く地名です。続いて立岡公園を散策することにします。立岡は松橋の実家に近いことから、幼稚園の頃からの記憶がありますが、20年以上行っていません。今は桜の名所とバス釣りのポイントとなっているようです。立岡も、どこにでもある風景が広がっているだけですが、湖畔を歩けば心が安らぐと思います。

2日目は、旧名の豊野村や中央村などにある小さな石橋を回ることになります。通潤橋に行く度に、途中の石橋が気になっていたからです。豊野の山崎橋を皮切りに、最

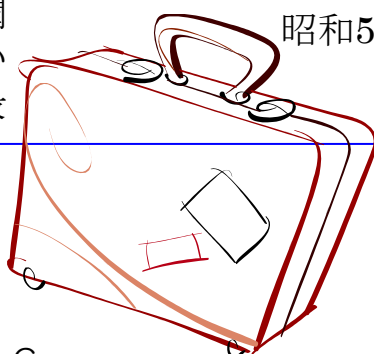
後は単一アーチ式石橋としては日本3位の大きさを誇る霊台橋でしめるつもりですが、石橋に関して全く知識がないので、予習をする必要がありそうです。当然昼食は鮎の塩焼きです。

3日目は、天草上島です。いつものとおり、不知火側から三角に向かい、上島で不知火海に面する龍ヶ岳を訪ねようと考えています。40年前に父に連れられ釣りをした場所を探すつもりです。そこは多分倉岳に近い、小さな岬の先端でした。御所浦島が見えていた気がします。記憶を辿り、探し出すつもりです。「40年前の自分を探そう」などという気は全くありませんが、帰省自体が自分探しですよ。認めたくありませんが。

4日目は、金峰山の西側にある宮本武蔵が五輪書を書いた霊巖洞（雲巖禅寺）を最初の目的地にします。これまで一度も行ったことがありません。そもそも武蔵が晩年熊本で暮らしていたことが頭にきちんと入ったのは、恥ずかしながら30歳になってからです。帰り道には、漱石のあの「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」で始まる草枕に描かれている峠の茶屋に車を停めるつもりです。但し、私は流し読みしかしていませんので、小説を理解しているわけではありません。仮に真剣に読んだとしても理解できなさそうです。「非人情」はもちろんその後の「則天去私」の境地に成りえないのは確かです。最後は清正公縁の本妙寺に立ち寄る予定です。

5～7日目をどうするか考えると、一層“ワクワク”します。とにかく、身近な小さな旅に出かけます。当然、実家に顔を出しますし、夕食、宿泊する温泉地、同級生との再会も楽しみですが、それはこれからゆっくり考え、東京鶴城会の会場でお話しできたらと考えています。

昭和53年卒 泥海次郎



## その名は「アマクサ」

ボストンの楽しみといえば、シーフード。中でもロブスターやクラムチャウダーは有名で、寒くなりだしたころのクラムチャウダーと言えば、心も体も温まる一品（逸品）である。ボストンがあるマサチューセッツ州や、その北にあるメイン州はともにオイスター（牡蠣）も有名であり、街中にはオイスターバーが点在し、シーフードを提供するお店には、前菜として必ずと言っていいほど、オイスターがメニューにある。ボストンで“アマクサ”という言葉聞いた時、鳥肌が立ったのは言うまでもない。何がアマクサかという、牡蠣の品種が『アマクサ』だったのである。

メニューには、オイスターの産地が必ず記載してある。その多くが採れた産地のものであったり、品種改良された土地の名を冠しているのであるが、その“アマクサ”も天草で改良された牡蠣の一種で、ボストン近辺で採れたのではあるが、アマクサの名前がついていた。アマクサの名前を聞いた私は、東京の飲み屋で地元の名物が出てきた時よりも比べものにならないくらい興奮して「このアマクサという名前は、自分が産まれたクマモトというところにあるんだ！」と声を大にして店員に話したのだが、“トキヨ”、“キョウト”ならまだしも、アジア人が興奮して故郷を語ったところで「アマクサ？」という顔をされたのは、無理もない。

ボストンでのおススメは、個人的にはロブスターよりもクラムチャウダーで、牡蠣よりもチェリー・ストーンというハマグリ的一种を生で食べるのが好きだった。チェリー・ストーンの身はややオレンジがかっ

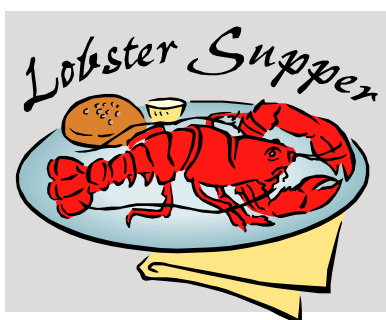
ており、噛むほどに貝の甘味を感じられる絶品である。日本でも稀にお目にかかることはあるが、産地で食べる贅沢ほどない。

その他の名物と言えば、ボストン・レッドソックスだろう。レッドソックスの本拠地、フェンウェイ・パークは大学からもすぐのところであり、チケットを購入して何回か観戦に行った。当時、イチローがマリナーズに在籍しており、松坂投手・岡島投手も活躍していたころだったので、日本人としては誇りを持って球場に足を運ぶことができた。昨シーズンも優勝を果たしたが、我われがいた2007年にも地区優勝を果たし、優勝パレードも盛大にボストン市内で行われた。ボストン市内には、レッドソックスの帽子を被った老若男女を多数見かけ、若い女の子もレッドソックスの帽子をよく被っているのを見かけた。東京でいえば、ジャイアンツの帽子を20代の女の子が被っているようなもので（まずいない）、いかにレッドソックスが地元ファンに愛されているかがわかる。

ハーバードの教授の中にも熱狂的なレッドソックスファンがおり、レッドソックスがニューヨークヤンキースと対戦し、負けた日にはもう、機嫌が悪くなるくらいだった。講義の始まりは必ずといって良いほどレッドソックスの試合の話から始まり、「この中にヤンキースファンはいるか？」と聞いては、手を挙げた学生には「あなたは落第！」と冗談交じりに話をしていたのが懐かしい。

内山 伸（平成5年卒）

内山さんは、現在、浅草クリニックで内科医としてご活躍中。



# 鯨 肉 に 思 う

この間、某新聞のコラム覧に、クジラの南極海での調査捕鯨ができなくなった旨の記事を見ました。私たち世代は、クジラの肉を食べて子供時代を育ちました。

実家では田植えの日は、「にわたりの鍋」、暮れの餅つきの日には、「うさぎ鍋」が恒例になっていました。島育ちなので、日頃は魚、貝、野菜と地産地消の生活でしたが、なぜかクジラ肉は良く食べていたように思います。あの凍った赤みの刺身は大好物でした。生姜醤油に漬け込んで、天日干ししたおつまみも、とてもおいしい物でした。

後に学校給食では、竜田揚げにもなったようですが、当時、戸馳小学校では、まだ給食は始まっていませんでした。これから益々高級食材となってしまうであろうクジラです。

先日、たまたま、スーパーでクジラベーコンを買って「母も好きだったなー」と新聞を読みながら、ひと時思い出していました。

昭39年卒 石渡 優子



# 知ったかぶりの“まめ知識” - vol.3

-知っとなはっですか？-

「東京23区で一番高い山」編

今回は、東京23区内で一番高い山です。愛宕神社(写真右)がある愛宕山は、標高25.7メートルで天然の山としては、都内23区内では一番高い山といわれています。江戸時代は、山頂からの見晴らしは実に素晴らしく、見物客で大いに賑わっていたそうです。

ご存じのように、愛宕神社に上がる石段「出世の石段」(写真右下)は、とても急勾配で、上るのに一苦労ですが、降りる時は、かなりの勇気が必要です。私は、2年前の桜の季節に愛宕神社を訪れました。暫し、喧騒を離れて都心部の自然を満喫しました。皆さまも是非、一度、行ってみてください。「出世の石段」の上り降りは、「勇気」と「覚悟」が必要ですので、強くはお勧めしません。



## 弁護士 伊藤 尚 (平成11年卒)

東京都千代田区永田町2-4-3永田町ビル8階  
奥川法律事務所 (TEL:03-3580-6358)  
個人または会社等の法律関係でお悩みがあれば、  
ご遠慮なく何でもご相談下さい。

宇土高校の卒業生、またはその関係者の方には、初回法律相談無料(30分5,400円)でご相談をお受けします。

## 少年事件に関与して

私は、東京で弁護士の仕事をしていますが、普段は民事事件を扱うことが多いのですが、たまたま担当したある刑事事件(少年犯罪)で、「付添人」という仕事をすることになりました。

付添人とは、犯罪行為に及んだ少年が家庭裁判所の審判を受け、処分が決定されるまでの間、少年のサポートをする仕事で、少年の人権を守るための弁護活動とともに、親御さん、家庭裁判所の裁判官、少年の生活状況を調査する調査官と連携し、少年の更生のために最も適切な処遇は何かということを考え、生活環境を整える活動を行います。

少年の処遇を考える上では、少年本人や家族と、なぜ非行に及んだのか、どこに問題があるのか、これを断ち切るには何をすれば良いかといったことを様々な観点から話し合います。

そうすると、少年を取り巻く人間関係が希薄だと感じるのがしばしばあります。

私が子供のころは、悪いことをすれば、親にきつく叱られるのはもちろん

のこと、学校の先生にお説教されたり、友達の親御さんや近所のおじさんおばさんにも怒られましたし、社会の大人全体が地域の子供に視線を向けているという環境があったように思います。

ところが、最近では、家族の会話が少なく、学校の先生はクレームの対応に精一杯で、近所のおじさんおばさんとは挨拶さえしたことがなかったりするケースも珍しくありません。

また、今の社会では、私が子供の頃に宇土の大人たちがそうしてくれたように、近所のおじさんがヨソの子供をお説教することは、いろんな意味で危険を伴います。

このような社会で育つ少年のことを考えると、子供のころに煩わしいと感じた大人の目線が、実はとても“暖かい”ものであったと実感させられます。

なかなか難しいことではありますが、子供たちがまっすぐ成長していけるよう、社会全体で厳しく温かい目で見守っていただければいいなと思っています。

平成11年卒 伊藤 尚

## <編集後記>

東京は、2/8と2/14の二週連続の記録的大雪に見まわれました。交通機関のマヒ、ケガ人の続出、そして、山間部では数日間、孤立状態が続く、甚大な被害をもたらしました。我が家(さいたま市)も、近所と協力して、早朝から雪かきに追われました。北海道・東北では見慣れた光景ですが、自宅から見る銀世界は、まるで別世界。至る所に、「雪だるま」や「かまくら」が作られており、雪国に住んでいるようで、「春よ来い！」の心境がこれほどまでに強く感じられたことはありませんでした。

56会 (昭和31年卒)

大川 勝利  
櫻井 正男  
島田 勝年

ウイルス対策・除菌・抗菌・消臭  
『マタタコ』  
株式会社エースネット

萩原秀文  
(昭42年卒)

38会代表

田中 幸資  
大久保 千鶴  
(昭38年卒)

車の買い取り・販売のご相談は  
日東金属株式会社・車輻部

代表取締役 永井 秀夫  
(昭40年卒)

〒158-0083 世田谷区奥沢7-11-5  
TEL:03-3704-0161 Fax:03-3704-0170

東京宇城市会  
宇城市出身の方、是非、ご参加下さい。

塚原 直美 (昭52年卒)

〒154-0002  
東京都世田谷区下馬3-32-8-205  
E-mail: yavo-reene@s9.dion.ne.jp

PAPER AND PRINTING  
グローイン

代表 森内 忠美  
(昭50年卒)

〒101-0051  
東京都千代田区神田神保町1-62 2F  
TEL & FAX 03(3259) 1116  
E-mail: growintn@aol.com

昭40年卒 境屋 由夫  
(宇土市本町5丁目出身)

実家は蒲鉾製造販売の老舗です。  
宇土に御帰郷の切は是非、「境屋  
かまぼこ店」にお立ち寄りください。

住所: 宇土市旭町421-4  
TEL: 0964-22-0162

松藤 明  
(昭和50年卒)